

2021年4月25日～5月1日 各家庭でのディポーション用テキスト

[病の床にて]

私は静かに身を横たえる
朝 私の目が開くとき
この身がここにあっても
この身がかしこにあっても
少しも思い悩むことはない

重き荷を背負い
旅路に疲れ果てた私は
むしろ憩いの時を求める
私を愛すると言われる方の胸に
私は顔をうずめたい

健やかだった右の手も
今はかつての日のように動かない
私はひとりで行かなければならない
今まで歩いたことのない遠い道を

黙って行かなければならない
私の熱意も 勇敢さも
誇りであった力の強さも
すべては過去のもの
私はとうとう来てしまった
何もしたくない無気力なところに

私の半日の仕事は終わった
なすべきことは もうなし終えた
私はいまささげたい
私の忍耐の心を
私の忍耐の神に

メアリ・ウルスィー・ハウランド

■病気による訓練 (1/3)

この病気は死で終わるだけのものではなく……。 (ヨハネ 11:4)

土のちりから造られたかよわい私たち人間は、ありとあらゆる恐れや肉の弱さにさらされやすい。その中でも無視できないものは病気である。私たちははちきれそうな健康体を与えられていても、それをすばらしいこととも思わず、それを与えてくださった方に感謝しようとしめない。いざ病床に伏すようになって、活発に動くことができなくなり、喜びは落胆となり、歌はため息となり、昼は寂しく夜は長くなり、力が衰え、涙があふれてくるときに、私たちは病気による訓練を経験する。

この訓練の難関はおそらく、執拗な肉体的苦痛や、衰弱のための疲労にあるのではなく、むしろ、絶えず私たちを悩ます次のような疑問にあると思われる。「なぜ私はこんな病気にかかったのか。私に何か落度があったのか。それでこんな苦しみ

にあうのだろうか。この苦しみは私の罪の結果なのか。私は神の寵愛を失ってしまったのだろうか。」

私たちの病気は、自分自身の罪の結果であるかもしれない。主イエスがベテスダの池のほとりで、三十八年間病気に悩んでいた人をいやされたのち言われたみことばが思い出される。「見なさい。あなたはよくなった。もう罪を犯してはなりません。そうでないともっと悪い事があなたの身に起こるから」(ヨハネ 5:14)。この箇所からは、この人の病気が何であったかはわからないが、主のみことばから判断して、明らかに彼自身の罪のためにそのような苦しみを味わわなければならなかったようである。

このような例は、この人ばかりではない。ミリアムはモーセに向かってつぶやいたので、「らい病にかかり、雪のように白くなった」(民数 12:10)。ゲハジは主人エリシャの方針に反し、ナアマンの携えてきた贈り物に心を奪われて罪を犯したので、「らい病にかかって雪のように白く」なった(Ⅱ列王 5:27)。アサ王は若いころ大いに神に助けられたが(Ⅱ歴代 14、15 章)、のちに自分の富に頼るようになり、神の預言者の戒めを拒否したために、「その治世の第三十九年に、両足とも病気にかかった。彼の病は重かった。ところが、その病の中でさえ、彼は主を求めることをしないで、逆に医者をも求めた」(16:12)。ヨラム王が「主の目の前に悪を行なった」ので(21:6)、エリヤは手紙を送って言った。「主は大きな災害をもってあなたの民、あなたの子たち……を打つ。あなた自身は、……大病をわずらい……」

(21:14、15)。主は中風の男に、「子よ。あなたの罪は赦されました」と言われたが(マルコ 2:5)、そのおことばの中には、病気と罪との何らかの関係が示されているだろうか。